キャンピングカーで楽しむスロートラベル

はじめよう スローなくるま旅

「スローライフ」、「スローフード」などという言葉とともに、今「スロートラベル」という言葉に好感を持つ人が増えています。

「ゆったりした旅」。
直訳すると、そういう意味なのですが、そのような考え方が広まってきた背景には、ロハス（LOHAS）と呼ばれるライフスタイルが定着してきたことが関係しています。
ロハスとは、人類と地球の共存をテーマに、地球資源を浪費する生活構造から脱却して、持続可能なライフスタイルを追求しようという思想です。3年ほど前から欧米を中心に広がり始め、今は日本でも広く定着するようになりました。

「スローフード」、「スローライフ」などという言葉も、そのロハスと同じ考え方から出ています。
「スローフード」が、効率よく生産されて全国展開しているファーストフードに対し、個々の土地や風土に根づいた伝統的食物や食材に注目しようというムーブメントを意味したように、「スロートラベル」も、旅行先の人々や文化と交流するというニュアンスを持っています。

つまり、スロートラベルは、旅人が自分の旅のテーマを探し、それと出会う旅といえましょう。
だから、欧米では「スロートラベルは自己実現の旅」ともいわれています。

テーマを発見してそれと出会う旅は、やはり、気に入った場所を見つけてゆったり滞在することから始まります。
地元の人々と、のんびりと会話を交わす。
地の食材を使った、地の料理や酒を味わう。
その土地を育んだ文化や歴史に触れる。
観光地として知られていない、その土地だけの素敵な景色を探し出す。

観光地から観光地へと効率よく移動して、短時間のうちにたくさんのものを見物するという、従来の観光旅行のパターンから脱却することが求められるわけですね。

そういう旅を実現するのにいちばん適した移動手段は何でしょう?
徒歩
自転車
カヌーやカヤック…

もちろん、スロートラベルにふさわしいのは、そういうエコロジカルな移動手段かもしれません。
でも、それをすべて可能にするのはキャンピングカーです。
気に入ったキャンプ場などを見つけ、そこを拠点として、それこそ徒歩でも自転車でも、カヤックでも。

キャンピングカーでは、スロートラベルを実現するための二次交通手段を車載することもできますし、それ自体が、長期滞在を快適にこなす装備を満載した前線基地でもあります。
まさに、キャンピングカーこそ、スロートラベルの“代名詞”ともいえる存在かもしれません。

地球環境を守るために、ドライブにおいても「無理」と「無駄」をなくしていこうという動きが強まっています。
キャンピングカーは、すべての自動車の中で、唯一走るときよりは停まっているときに真価を発揮する自動車です。

また、キャンピングカーの多くは、外壁と内壁の間に断熱材が封入され、車外の温度変化に左右されにくい室内環境を維持できるようになっています。つまり冷暖房効果を得るために、無駄なエネルギーを浪費しない構造になっているのです。

キャンピングカーは、地球に優しさを発揮することによって、初めてそのオーナーにとっても快適な時間を約束するところに本質があります。

21世紀のスロートラベルに最適な移動手段として、今、キャンピングカーに対する世界の注目は高まっています。

そのことに、日本の多くのキャンピングカーユーザーはすでに気づいています。
「キャンピングカー白書2007」では、ユーザーが将来実現してみたい夢を尋ねる項目があります。
そのなかで一番多かった答は、
「気に入った場所でのんびり滞在すること」。
なんと、その回答率は63.4%で、2位の「自分で改造を楽しむ」（23.1%）を大きく引き離しています。ちなみに、よく話題になる「日本全国を一周する」という答は9.1%。
実際に、キャンピングカーを使っている人たちは、スロートラベルの楽しさを直感的に感じとっているようです。

始めましょう!　キャンピングカーライフ。
地球へのいたわりと、自己実現の旅を両立させるためにも。

スロートラベル 虎の巻

免許皆伝

スロートラベルを極めて
あなたのくるま旅を
もっと有意義で
楽しいものにしませんか?

その一　不便を楽しむべし

キャンピングカーは「動く家」。
家庭と同じように、電気、ガス、水道設備が整った移動するマイホーム。
そんな夢を抱いてらっしゃる方が多いのではありませんか。

しかし、少し違います!
確かに、キャンピングカーの中にはキッチンがあったり、シャワー設備があったり、テレビがあったり、エアコンやヒーターが備わったものが多くありますが、はっきり言って、家庭と同じようには使えません。
「水道」があるといっても、クルマに積めるのは10リットルか20リットルタンク。多くても100〜150リットル。100リットルあったにせよ、4人でシャワーを使えば1回で終わるぐらいの量でしかありません。

電気が使えるといっても、家庭と同じようにテレビを見たり、パソコンを使ったりするためには、キャンプ場でAC電源に接続するか、もしくはサブバッテリーの力を借りて、インバーターを駆動させなければなりません。あるいは、人に迷惑をかけないように、発電機を回すか…。
いずれにせよ、家と同じように電気を使うためには、ものすごい智恵と労力を必要とします。

ガスもしかり。ボンベに入ったLPガスを使うにせよ、カセットガスを使うにせよ、一定量を使った後は、必ず充填や補充の面倒がつきまといます。
トイレも自由に使えますが、そのタンクに汚物が溜まったときは、それをオーナーが処理しなければなりません。

キャンピングカーには「不便がいっぱい!」
それが実状です。

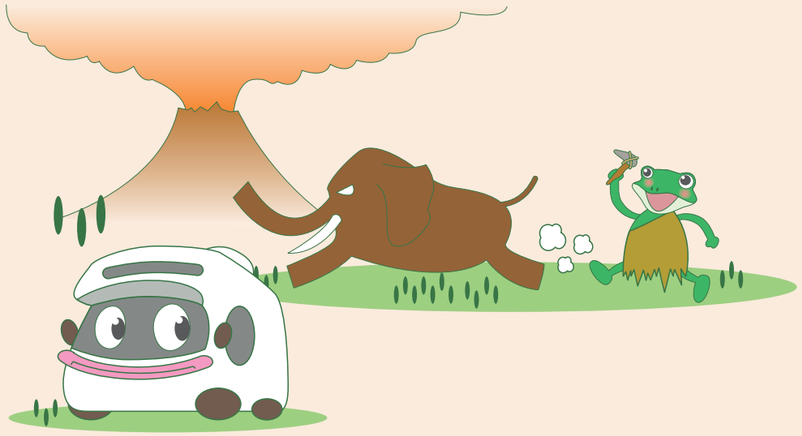
しかし、だからこそ面白い!
そうであって、初めて楽しい!
キャンピングカーの世界はそういう世界なのです。

つまり、都市文明に慣れてしまった人たちに、「生活の原点」を教えてくれるもの。それがキャンピングカーです。
使う電気にも限りがある。
ガスにも限りがある。
水にも限りがある。
残り少なくなってきたら、どこかで、それを補わなければならない。
はて?　どうする?

そんなことを考える生活を家庭の中で体験することなんて、絶対ありません。
でも、そういう体験を、「非日常」と呼ぶのではないでしょうか?

旅が便利になったら、それは「日常の延長」でしかありません。日常の延長を「旅」とするには、少し淋しいものがあります。
「非日常の旅」
それを与えてくれるのがキャンピングカー。

人生、何がいちばん面白いかと言えば、自分の生活を、自分の創意工夫でクリエイトすることではありませんか?
キャンピングカーはそれを可能にしてくれます。
そして、電気、ガス、水などの「資源の重要性」に対して鋭敏になる心を育ててくれます。
キャンピングカーで目覚めた朝は、前の晩とは違った自分を発見します。



その二　家族の絆を大事にするべし

キャンピングカーは、基本的に狭いものです。
椅子やテーブル、キッチンとベッドが備わった車種があるといっても、基本的に、みなすべて見渡せる範囲にちんまりと収まっています。
家庭のようにリビング、子供部屋、お父さんの書斎などというふうに個室ごとに仕切られた空間は、限られたキャンピングカーの中で望むべくもありません。

だからいいのです!
つまり、広すぎて家族が拡散する方向に進んでいる「家」とは逆に、キャンピングカーは狭いがゆえに、家族の求心力を高めることができます。
家族の求心力が高まった空間を、仮に「団らん」という言葉で表現してみると、キャンピングカーには「団らん」があります。

いま日本の家庭から「団らん」が失われたという声はあちらこちらから聞こえてきます。
その理由はいくつか考えられますが、まず1980年代以降、各家庭に子供用の個室が定着し、食事以外の時間帯には子供たちが親の前から姿を消すようになりました。

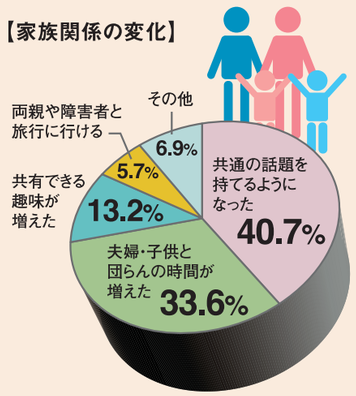
また、テレビが各個室に1個という率で普及し、「親子で同じ番組を楽しむ」という日常的な光景も家庭から消えていきました。

さらに、子供同士の連絡に欠かせなかった家庭用の固定電話が携帯電話の普及によって役目を終え、固定電話を使って子供たちが連絡を取り合う姿を、親がチェックする機会もなくなりました。

では、食事の時間だけは、親子の絆が保たれているのか。
…というと、これも父親の残業、母親のパート、子供の塾通いなどで、各家庭から家族が一緒に食事する時間が消えていきました。
つまり、1970年代ぐらいまではかろうじて保たれていた家族の団らんが、今ではほとんど壊滅状態になっています。

キャンピングカーの狭い(?)ダイネットは、実は、この日本人から失われた「団らん」を回復する場として、家庭のダイネットに取って代わろうとしています。
なにしろ、親子はクルマの中では、否が応でも向き合う時間が確保されます。
そうなれば、互いに会話を交わすようになるし、会話があれば情報交換が生まれ、お互いにいま何を求めあっているかを知り合うようになるでしょう。
『キャンピングカー白書2007』によると、購入した人の33.6%が、「夫婦・子供と団らんの時間が増えた」ことを認めています。
さらに、40.7%の人が、「家族で共通の話題を持てるようになった」と感じています。
その二つを合わせて、74.3%の人が、「キャンピングカーによって家族の絆が深まった」ことを実感しています。

【家族関係の変化】



その三　マナーを守って地元の人と触れ合うべし

スロートラベルは、地元の人々やその地域の文化との交流から生まれます。
しかし、それは快適なことばかりとは限りません。
通りすがりの観光客ならば、お金を落としてくれるかぎり、地元の人たちはニコニコ顔で歓迎してくれます。

しかし、長期滞在となると、地元のルールを守れないヨソ者は、なかなか歓迎されないのが実状です。
早い話、その地域に合ったゴミの分別を守れない人。
宿泊が認められないような場所での、キャンピングカーの長期滞在。
その地域の人々が大切にしている郷土の文化などを粗略に扱ったりしても、暮らしている人たちの気分を害することがあります。

でも、それがうまく行ったときはまったく逆の成果が得られます。
人間は、遠くから来たヨソの人間を「マレビト」として歓迎したい動物なのです。
自分たちの文化やルールを知らない旅行者がやってきて、その旅人が、自分たちの文化やルールを理解し、楽しんでくれたら、住んでいる人間にとってどれだけうれしいことか!
そうやって人類は、アフリカの地からスタートし、何万年もかけて南アメリカまで旅を続けることができました。
その間には、きっと知らない人々同士の温かい交流がたくさんあったことでしょう。

スロートラベルは、異なる文化やルールを理解しようという気持ちから生まれます。

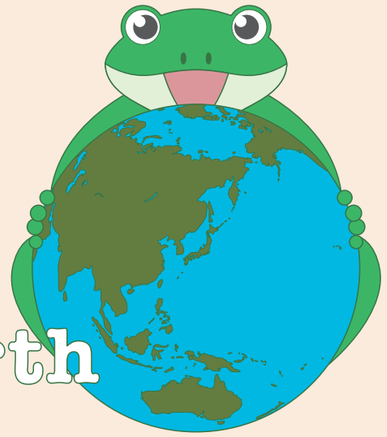
その四　ゴミを出さないよう心がけるべし

ゴミを出さないように心掛ける。
それはキャンピングカー旅行に限ったことではありません。
ゴミ処理に関わる膨大なコスト。それを焼却するために発生するCO_2。
さらに、最終的にはゴミとなってしまう資源そのものの無駄づかい。

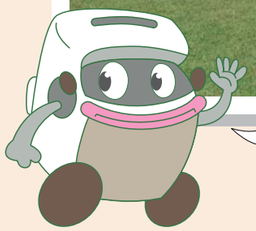
ゴミを出さないように心掛けるということは、今や地球環境保全のテーマと密接に結びついています。

スーパーなどで食材容器として使われるプラスチックトレー。コンビニで配布されるレジ袋。
それらも元は石油資源です。
石油の生産量がピークに達するのは、早くて2015年。遅くても2035年といわれています。
オイルピークがはっきり分かるようになって、いま世界各国の政府は、国を挙げて、様々な取り組みを開始しました。

ゴミを出さない心がけは、限りある化石燃料を少しでも延命させることにもつながります。
マナーを守って、ゴミを持ち帰る。
それはとりもなおさず、ゴミの量を減らすことにもつながるでしょう。
キャンピングカーユーザーが、まずその姿勢を訴えることは、とても大事なことのように思えます。



その五　キャンプ場を大切にするべし



スロートラベルの基地として、キャンプ場の果たす役割はこれからますます重要になってきます。
なにしろ、スロートラベルとして期待されている2大要素、
「ゆったり過ごせる」
「自然と接する」
という二つの条件を兼ね備えている宿泊施設として、キャンプ場はもっとも理想的な場所といえるでしょう。

今まではツーリング志向のキャンピングカーユーザーたちからは評判の良くなかった「アクセスの不便さ」というものが、これからは、逆にキャンプ場の武器となる日が来るはず。
アクセスが不便ということは、言い方を変えれば、「手つかずの自然が残っている」ということですからね。

幹線道路を走る自動車旅行では、どこの地域を走っても同じ看板を掲げるコンビニチェーンで飲み物を調達し、似通った造りの温泉センターで入浴するというステレオタイプ化された楽しみ方しかできません。
増え続ける道の駅でも、地域ごとの特色を生かすといいながら、建物の構造や利用者へのサービススタイルなどは、どこもほとんど変わりません。
それは利用者にとって、日本中どこに行っても同じ「風景」のなかを旅することに他なりません。

今はまだ、旅の便利さが優先される時代ですから、風景や環境の変化を楽しむという精神的な満足を得ることよりも、ロードサイドのインフラが整備されていくことの方が、旅行者にとってはありがたいことでしょう。
しかし、やがて、その結果として立ち現れてくる風景の画一化こそが、「退屈の原因」だと気づく人が増えてくることも間違いありません。

このときに、人工の香りが少ない「あるがままの自然」を売り物にできる施設が魅力を放ってきます。
そして、観光地のにぎわいをさんざん経験した旅行者たちは、「静けさ」が、お金を払うほど贅沢なものであることを、やがて理解するようになるでしょう。
スロートラベルという言葉が、心理的に「時間が止まったような旅」を楽しむものだとしたら、その核となるものは「自然」と「静けさ」。

そういうキャンプ場のメリットを、いちばん享受できる最短距離にいる乗り物は何でしょう?
答はキャンピングカーですね。

キャンプ場には、連泊割り引きや、シニア料金サービスを設定しているキャンプ場がたくさんあります。
また、「オートキャンプ白書 2007」によると、ペット連れで楽しめるキャンプ場の割合は62.7%。これは、ペット同伴で旅行しているユーザーが4割近くいるキャンピングカーオーナーにとってもうれしい話。
キャンピングカーとキャンプ場の本当の蜜月が始まるのは、そんなに遠い話ではないように思えます。